洋１３－４１

「愛、アムール」　　✲✲✲

２０１３（平成２５）年3月１７日鑑賞
<シネ・リーブル梅田>

監督・脚本：ミヒャエル・ハネケ
ジョルジュ（パリの都心部のアパルトメントに暮らす音楽家）／ジャン＝ルイ・トランティニャン
アンヌ（ジョルジュの妻、音楽家）／エマニュエル・リヴァ
エヴァ（ジョルジュとアンヌの一人娘）／イザベル・ユペール
アレクサンドル（アンヌの愛弟子のピアニスト）／アレクサンドル・タロー
ジョフ（エヴァの夫）／ウィリアム・シメル
２０１２年・フランス、ドイツ、オーストリア映画・１２７分
配給／ロングライド

<カンヌ国際映画祭パルムドール賞受賞作だが・・・>

本作は２００９年の『白いリボン』に続いて、２０１２年カンヌ国際映画祭パルムドール賞を受賞した、ミヒャエル・ハネケ監督の最新作。さらに本作はアカデミー賞外国語映画賞も受賞したから、名作中の名作に違いない。確かに『白いリボン』はすごい映画だった（『シネマルーム２６』２００頁参照）が、その少し前に観た『ファニーゲーム　Ｕ．Ｓ．Ａ．』（０７年）はあまり良くなかった（『シネマルーム２２』未掲載）。

予告編を観た限りでは、本作は音楽家の老夫婦が織りなす終末の人生のようだったから、どちらかというと「うっとうしい映画」というイメージが強く、あまり観に行く気がしなかったが、やはりそんな名作は観ておかなければという義務感もあって、鑑賞。しかし・・・。

<たしかに、すばらしい老夫婦だが・・・>

愛弟子のピアニスト・アレクサンドル（アレクサンドル・タロー）の演奏会から戻ってきた夫のジョルジュ（ジャン＝ルイ・トランティニャン）と妻のアンヌ（エマニュエル・リヴァ）が住むアパルトメントは、その広さを見ただけでもかなり高級そう。演奏会から帰った後、夫が妻に対して「今夜の君は、きれいだったよ」と声をかける姿は洗練されているし、翌朝の食事風景も微笑ましい限り。年をとったとはいえ、さすが２人とも一流の音楽家だっただけのことはある。この老夫婦の生活はかなりリッチで幸せそうだ。

ところが、そこで突然アンヌの身体に異変が起こり、手術をしたにもかかわらず「失敗率５％」の方の結果になったから、さあ大変。これからアンヌは車イス生活だが、気も強く誇り高い妻をジョルジュが介護していくのは大変だ。もちろん専門の看護師も週に数回来てもらうことにして万全の体制をとったが、アンヌの病状は悪くなるばかりだ。

本作中盤はずっとジョルジュによるアンヌへの献身的な介護の姿が描かれる。こんな姿を見ていると、２人はすばらしい夫婦だということがわかるし、ジョルジュの献身ぶりには頭が下がるが・・・。

<ずっと観ていると、だんだんしんどく・・・>

ジョルジュとアンヌにはこれも音楽家になっている一人娘エヴァ（イザベル・ユペール）がいるが、彼女は夫のジョフ（ウィリアム・シメル）と共に世界各地を回っているから、忙しくてめったに両親の家には寄れないらしい。それでもたまにやってくると、母親の病状が大きく変化（悪化）していることに驚くと共に、このまま母親を家に置いていたのではダメだ、と心配。しかし、それを口にすると、父親のジョルジュからピシャリと反論が・・・。

ジョルジュを演ずるジャン＝ルイ・トランティニャンはフランシス・レイ作曲の『ダバダバダ』のスキャットが全編に流れる主題歌が大ヒットしたフランス映画『男と女』（６６年）に主演した俳優だが、そんな俳優が８０歳を超えて本作のような役を演ずるのをずっと見ていると、だんだんしんどくなってくる。もっとも、本当にしんどいのは見ている方より本人自身だろう。その本人は娘に対しても看護師に対して一貫して気丈に振舞っていたが、ついにある日・・・。

<夫の介護疲れによる妻の殺人事件が続発中だが・・・>

本作の冒頭は何の前触れもなく警察官がアパルトメントの中に押し入り、ムッとする臭いを感じて窓を開けるシークエンスで始まるから、これだけで容易に本作の結末が想像できる。介護はする方も大変だが、介護される方も大変。しかも、スクリーン上で「ああー、ううー」というワケのわからない言葉（うめき声？）だけで役を演じなければならなくなると、女優も大変だ。アンヌを演ずるエマニュエル・リヴァは１９５９年の『二十四時間の情事』で一躍世界的に有名になった女優だが、それから半世紀以上経った今、８５歳にもなって本作のような役を演じるとは夢にも思ってなかったのでは・・・。

少子高齢化に伴う老人の介護問題は近時の大問題だが、そんな中、最近の日本では夫の介護疲れによる妻の殺人事件が続発している。その動機は①「妻は５年ほど前から寝たきりになっていた。楽にしてやろうと思って刺した」（２０１２年３月大阪・岸和田の事件）、②「老人ホームではなく、自宅で介護したい」「介護に疲れた。自分が先に死ねば寝たきりの妻が困ると思い、一緒に死のうと思った」（２０１３年２月奈良の事件）というものだが、このままの状態では、いずれジョルジュも・・・。

<ミヒャエル・ハネケ監督の今後の目標は？>

去る２０１２年１０月１７日、若松孝二監督が不慮の事故で亡くなった。その遺作が３月１６日に観た『千年の愉楽』（１１年）だ。『実録・連合赤軍　あさま山荘への道程（みち）』（０７年）（『シネマルーム１８』５６頁参照）と『１１・２５自決の日　三島由紀夫と若者たち』（１１年）（『シネマルーム２９』９３頁参照）という、「左右」両極端の映画を完成させた後の最新作として彼が取り組んだのは、中上健次の原作『千年の愉楽』。「路地」を舞台とする何とも壮大な生と死の物語の映画化を完成させたところで突然亡くなったのは、私には神サマのいたずらとしか考えられない。しかして、本作のような映画を最新作として監督したミヒャエル・ハネケ監督の今後の目標は？

映画監督には、①『戦場のピアニスト』（０２年）（『シネマルーム２』６４頁参照）、『オリバー・ツイスト』（０５年）（『シネマルーム９』２７３頁参照）、『ゴーストライター』（１０年）（『シネマルーム２７』１４３頁参照）、『おとなのけんか』（１１年）（『シネマルーム２８』１３６頁参照）のロマン・ポランスキー監督（１９３３年生まれ）、②『カティンの森』（０７年）（『シネマルーム２４』４４頁参照）のアンジェイ・ワイダ監督（１９２６年生まれ）、③『コロンブス　永遠の海』（０７年）（『シネマルーム２５』未掲載）のマノエル・ド・オリヴェイラ監督（１９０８年生まれ）等々、高齢の名監督がたくさんいる。したがって、１９４２年生まれのミヒャエル・ハネケ監督には今後もさまざまな分野での問題提起作をつくってもらいたいが、そんな目で見ると本作のようなテーマは少し早すぎたのでは？つまり、本作のような映画を監督するのは監督が８０歳、９０歳になってからでも良かったのでは・・・。

２０１３（平成２５）年3月２１日記